

NICU親の会発足に向けての経過報告

Progress report for the meeting start of the NICU parent

西4階病棟

内山直美 一ノ瀬晴香 降旗智夏 篠原なつよ 曾根原由紀 上條陽子

〈要旨〉早産・低出生体重児は、児の過敏性による育てにくさや運動発達の遅れが指摘されており、児童虐待のリスクが高い¹⁾と言われている。このような背景から、新生児集中治療室(以下NICUとする)に入院した児を持つ親へは、通常以上にサポートが必要である。しかし、同じような状況や状態で産まれた児を持つ親同士が接する機会は少ない。当院のNICU入院児は年間40名程いるが、退院後のサポートは、地域もしくは当院発達外来のみであり、思いや体験を共有する場がなかったため、今回、NICU「親の会」の発足を考えた。発足するに当たり、需要の有無と親が望む内容を知るためのアンケート調査を実施した。アンケート結果からは、早産の親は、「親の会」のような機会を望んでいることが明らかとなった。「親の会」開催にあたり、内容としては、小児科医師からの児の発達に関する話や同じ境遇の親と話したい、気持ちを共有したいといった意見が寄せられた。これらアンケート結果をもとに、第1回「親の会」を開催したところ、早産の親からは、「悩んでいたのは自分だけではないということがわかった」などの意見が聞かれた。早産の親にとってこのような機会は必要であり、退院後の育児サポートになると考える。

キーワード：親の会、早産の親、退院後の育児サポート

I. はじめに

早産・低出生体重児は、児の過敏性による育てにくさや運動発達の遅れが指摘されており、児を持つ親へのサポートは通常以上に必要であると言われている。しかし、実際には、早産の親同士が接する機会は少なく、思いを共有する場も少ないのが現状である。当院においても、退院後のサポートは、小児科発達外来のみであったため、今回、早産・低出生体重児の親の会を発足しようと考え、平成19年1月から平成24年6月にNICUに入院した児の親196名にアンケート調査を実施し、このアンケート調査をもとに第1回親の会を開催したので、その経過を報告する。

II. 目的

1. 早産・低出生体重児の親の会を立ち上げるにあたり、親の会需要の有無と親の気持ちをアンケート調査にて確認し、早産・低出生体重児の親の会の目的や対象、その内容を明確化する。
2. アンケートをもとに、第1回親の会を開催する。

III. 方法

平成19年1月～平成24年6月にNICUへ入院した児の親196名にアンケート調査を実施。単純集計と自由記載の育児中の不安について質的に分析した。これらのアンケートをもとに、平成25年6月1日に第1回「親の会」を開催した。

IV. 倫理的配慮

1. 対象者へは研究の趣旨とプライバシーの保護、研究承諾を拒否しても、児の診療・治療・ケアに何の不利益も被らないことを文書にて十分説明し、同意を得た。
2. 説明文書にてアンケートの提出をもって、研究への同意とさせて頂くことを明記した。
3. アンケートは無記名とし、個人を特定することができないため、途中で研究への参加を取りやめることができないことを明記した。
4. アンケートで得た情報はデータ入力後にシュレッターにて破棄し、情報の漏れがないよう十分配慮した。

V. 結果

アンケート回答数は76名、回収率は38.7%。「親の会」への参加希望に対しては、65名(86%)が希望ありと回答し、「親の会」開催時期としては、入院中～3ヶ月頃の開催希望が18名、3ヶ月～6ヶ月が35名、6ヶ月～1歳が2名だった。

「親の会」開催時の内容としては、医師からの話や体験者の話を聞きたいという希望が50名以上あった。育児中の不安や困った事への自由記載では、「周りに同じような立場の人がいなかったため、こういう時はどうしたらいいかなど聞ける人がいなかった」「成長が周りの子に比べて遅く心配だった」など、成長・発達に関する不安や周囲に相談できる人や場所がなかったとの意見が聞かれた。「親の会」に対しては、「親同士のつながりが欲しい」「同じ体験した者同士が話すだけでも気持ちが楽になりそう」などの意見が聞かれた。以上の結果から、退院後の親にとって、「親の会」は必要であること、親は、児の成長・発達への不安を常に抱えていること、同じ境遇の親とのコミュニケーションを必要としていることが明らかとなった。

そこで、アンケート結果をもとに、「親の会」の内容を検討後、平成25年6月1日に、第1回「親の会」を開催。アンケート調査にご協力いただいたご両親とNICUに入院していた児とその兄弟を対象とし、参加家族は29家族、総勢82名だった。今までの体験を親同士が共有できること、「親の会」を通して親同士の繋がりがもてることをテーマとしました。会の内容としては、小児科医師からの話、先輩ママからの話、在胎週数毎に分けたグループ毎での茶話会を実施。その間、お子さん達は、別室でスタッフとレクレーションができるように準備をした。

先輩ママからの話では、在胎24週と26週で早産された二人の方に、児を出産した時の思いや、ここまでの育児を振り返ってなど、実際に体験したことを自由に話していただきました。この

時には、頷きながら聞いている方、涙されている方など、自分の出産体験を思い出している様子が伺えた。また、在胎週数毎に別れた茶話会では、児の思い出の品を見せながら、初めてお子さんと会った時の気持ちや、これまでの育児について自由に話していただき、茶話会後には、親同士が連絡先を交換するといった様子も見られた。

「親の会」実施後のアンケートでは、「親の会」へ参加して良かったが26名(100%)、次回参加希望が26名(100%)。また、参加してみたの感想では、「悩んでいたのは自分だけではないということがわかった」「同じような思いを持ったお母さん方から沢山の話聞いて心が楽になった」などの意見が聞かれた。

VI. 考察

今回のアンケートから、退院後の親は、児の成長・発達の不安を常に抱え、相談できる場や相談できる人が少ない環境で育児をしていることがわかった。今回実施した「親の会」は、早産の親同士の繋がりを作ることができた。また、思いや体験を共有できたことで、今後の育児に前向きに取り組めるきっかけ作りにもなった。これらのことから、退院後の育児サポートの一つとして、このような機会は必要である。

VII. 結論

「親の会」は、早産した親にとって、体験や思いを共有できる場となり、親通しのつながりのきっかけになるものとなる。今後も退院後の育児サポートのひとつとして、親のニーズにあった内容を検討し、さらに充実した「親の会」を開催していきたい。

引用文献

- 1) 木原秀樹：NEONATAL CARE秋季増刊，141-155，2009.